

資 料

山田わかの母性主義を支えた家庭生活

— 家族関連新出資料をとおして —

今 井 涼

I はじめに

山田わか（1879-1957）は、婦人評論家・婦人活動家として、または社会事業家として知られている。そのきわめて母性主義的な思想から、保守的評論家との評価が一般的だが、近年になって、その思想や社会事業方面での実績について、改めて評価がすすむ人物でもある。筆者は普段、わかと同時代にも女性運動家として活動していた山高しげり（1899-1977）を社会福祉の観点から研究しており、その研究の過程で山田わかを知った。山高の思想と比較分析するため、わかについても研究をすすめるなかで、その思想がその全体にわたって「家庭」を最重要視する精神に貫かれていることに関心を覚えた。わかの母子保護の実践を支えた母性主義の思想における「家庭生活」へのこれほどまでに強い信頼と確信が、どこからやって来たのか。本研究は筆者のそうした関心から出発している。

山田わかについては、その数奇な経歴を明らかにしたもの、フェミニズム的観点から母性主義思想を評価したもの、社会事業的観点から思想と実践を分析したもの等、多様な観点から先行研究の蓄積がある。以下に主要なものを中心に、順に検討してみたい。

山田わかを経歴を一生涯にわたって初めて詳らかに追跡したのは、山崎朋子

(1778)の研究である。⁽¹⁾山崎は、長い間ベールに包まれ、関係者のわずかな証言から、憶測でしか語られることのなかった山田わかのアメリカ時代の前半生について、丹念な取材とアメリカ側の史料をも用いてその概貌を明らかにすることに成功した。しかし山崎の研究においては、母性主義思想についても一定分析が加えられているとはいうものの、その思想を支えた源であるところの家庭生活の実態の検討については、憶測のレベルに留まっている。

次に、社会事業家としてのわかの業績を整理したものには、五味百合子(1973)の研究がある。⁽²⁾五味は、その思想と実践には限界があったとしながらも、わかが波乱に満ちた出発を経て、その誠実な人柄と優れた資質でもって地道に運動や社会事業に取り組んできた歩みを、一定評価している。だが、五味の研究の眼目は、飽くまで社会事業家としてのわかの業績を整理することであり、わかの母性主義の思想や家庭生活については検討されていない。

山田わかの思想を扱った諸々の研究の中で、代表的なのは佐治恵美子(1975)の研究であると思われる。⁽³⁾山田わか母性主義を称揚するに至った経緯とその思想の位置付けを明らかにするもので、1913年～1921年頃までの青鞥・母性保護論争時代の論説を検討しながら、わかエレン・ケイ(1849-1926)の思想をどのように反映したのか、平塚らいてうらとの対比のなかで分析している。佐治の研究では、わかの思想について、「わかの場合、ケイの自由恋愛結婚論を地で行ったような、その恵まれた結婚体験に裏付けられた、妻の母の人格的解放の主張が見られる」と指摘されている。⁽⁴⁾なお、山田わかの思想を社会福祉思想として評価したものに、今井小の実(2005)の研究がある。⁽⁵⁾わか思想のみを主題にした研究ではないが、母性保護論争や母子保護法運動におけるわかの思想の位置付けや特徴を分析している。しかしこれら、わかの思想を取り扱った先行研究においても、わか自身の家庭生活とはどのようなものか、その実態を十分に明らかにしたものはない。これは資料的制約によるところが大きいと考えられる。

しかしながら、「家庭」はわか思想の基礎を成す最重要因子であり、わか自身の家庭生活の実態は、言わば最小レベルの「実践」と位置付けることができるはずのものである。それゆえに、わか家庭生活の実態を明らかにすることは、わか母性主義に対する理解をより深めるために意義があると考えられる。

今回、筆者はわか「家庭生活」について、その一端を知る手がかりを与えてくれる資料を、山田わか孫にあたる山田弥平治氏より、御厚意によって提供頂いた。本論は弥平治氏の許可を得て、山田家の個人的な写真や私信といった資料を元に、わか「家庭生活」の実践を検討するものである。以って、山田わか家庭重視の母性主義思想を、実感として支えていたわか体験的な基盤について明らかにすることを目的としたい。これによって、わか母性主義思想をより立体的に明らかにできると考える。

佐治（1975）の指摘するような、わか「恵まれた結婚体験」とはいかなるものだったのか。次章より、資料を用いて、山田わか家庭生活の実像に迫ってみたい。なお、資料の検討にあたっては、これまでの先行研究と、わか自身及び周辺人物の著作物等を適宜参照していく。

ところで、次章で資料の検討に入る前に、わか母性主義思想については、一定の整理が必要と考えられる。以下に簡潔にまとめておきたい。わか思想は一言で表せば、家庭主義とも言えるべきもので、エレン・ケイに影響を受けた母性主義的で保守的なものとされている。そしてそのケイ思想と言えば、端的にまとめれば、過酷な労働市場への女性の参画が母性機能の破壊を招き、深刻な社会問題をもたらしたとの反省から、男性は賃金労働に、女性は家事・育児に従事する男女の分業と、恋愛・結婚の自由等をつうじて、人種の改良を実現すべしというものであった。このケイ思想に大きな示唆を与えられたわか思想は、その概貌を次のようにまとめることができる。すなわち、女性の天職は家事・育児⁽⁶⁾にある。女性の経済的独立は、家事・育児に対するその労働に夫が報酬を支払うことで、あるいは、夫が報酬を支払えない場合は国家が代

わりに報酬を支払うことによって達成されるべきである。⁽⁷⁾ 以って母の生活を、母の「愛」を家庭に満たす程度に余裕のあるものにしなければならない。⁽⁸⁾ これらの女性の家事・育児の仕事は、「人類の進歩」のための女性の使命であり、以って社会の改良につなげるためのものである。⁽⁹⁾ この目的の実現のため、子どもの利益を図ることが肝要であり、⁽¹⁰⁾ 子どもの世話に当たる母の母性の保護が必要である。

わか母性の思想について以上のような概貌を念頭においた上で、その思想を支えた家庭生活の実態を検討する次章に移りたい。

II 資料検討

この章では、山田弥平治氏より提供頂いた資料の中から、わかとその家族の資料のうち、数点を紹介し、以ってわか母の家庭生活の実態の一端を明らかにしたい。しかし本題に入る前に、紹介する資料中の、わか母が育児に従事していた時代のわか母の家族関係を、一度整理しておこう。

写真1を参照されたい。⁽¹¹⁾ これはわか母の家族写真ともいえるべきもので、わか母、わか母の夫の山田嘉吉、そして山田夫妻が養育していた二人の子どもたちが写っている。詳細な撮影時期は不明だが、子どもたちの年齢から見て1920年前後に撮影されたものではないかと思われる。わか母と嘉吉は婚姻関係にあり、家庭の中では嘉吉が父、わか母が母という立ち位置にあった。山田夫妻が育てた子どもは全部で二人いるが、実はどちらの子も夫妻の実子ではなく、夫妻が引き取って養育していた子どもたちである。一人は山田民郎という名前で、これはわか母の生家である浅葉家方のわか母の妹の実子にあたる。⁽¹²⁾ 民郎は山田夫妻が養子にし、後にこの民郎が嘉吉の姪のこまと結婚して生まれたのが、今回の資料提供者の孫の弥平治氏という関係になる。もう一人は小林舜一郎と言い、これは舜一郎を産んで間もなくの妻を亡くしたという、山田夫妻の友人から預かったという

⁽¹³⁾経緯がある。舜一郎の方は養子ではなく、預かったという形の子であったようである。なお、山田家は人の出入りが多く、敷地内には親族や友人が幾人か居住しているのが常態だったが、基本的には写真1に写っているように、嘉吉とわか、民郎と舜一郎の四人で一つの単位の家族という捉え方をして良いだろう。以下に紹介する写真1～写真5の全ての資料は、以上の家族構成を念頭において、参照されたい。



写真1 山田家肖像写真、山田弥平治氏私蔵

1 民郎と舜一郎の手紙

紹介する資料の一点目は、民郎と舜一郎の手紙で、海外に出張に行っているらしい嘉吉に宛てて書かれたものである。正確な年代はわからないが、手紙の

文面中にわかきの著書「家庭の社会的意義」(1922)についての言及があることから、1922年以降～1930年までの間の、民郎と舜一郎が尋常小学校に通っていた頃に書かれたものと思われる。以下に、民郎、舜一郎の順にその内容を引用し、検討していく。なお、民郎の手紙、舜一郎の手紙ともに、筆者が判読不能であった文字は○で置き換えてある。

(1) 民郎の手紙

まず、民郎の手紙の文面から紹介する。⁽¹⁴⁾写真2を参照されたい。

なお、民郎の手紙では句点が頻繁に省略されているため、引用にあたって、本来句点が入るであろう箇所を、筆者の判断で空白に代えておいたことをことわっておきたい。

お父さん

御丈夫でご旅行なされることを御いのりします 僕は丈夫で學校に行つて無事に試験を終りました 御安心下さい。

母さんが岡山へ七月三十日に立つて講演に行くことになってから長田さんが来て母さんの本を全部二十冊づゝ買ってそれを岡山で賣りたいと云つて來ました そこで僕が本屋へ掛合に行きました。

最初近代文明社に行つて「家庭の社会的意義」を二十冊とゞけてもらふことにしました 八掛半でした。

次に東洋出版社へ行つた所「婦人の解放と性的教育」はよく賣れてもう四版になつて居ます そして「八時間労働の理論と實際」はあまりに賣れません もちろん二十冊づゝ、そろへました 七掛でした

耕文堂は「社會に頼づく女」は賣行はさほどでないので本屋へ賣つてしまつたので六部しかありませんでした。一円でした 「女」ですがこれは又非常な賣行で一千部すつたのが賣れてしまつてやうやく二十冊探して揃へ

たのですがしらべてみると表紙のよごれたのやこすれたのが大分あつたのでまた製本しなほしました　そして九月になると再版すると云って居ました。一元五十銭でした。

森江書店へ行つて「女　人　母」を二十冊そろへました。七掛半でした。日本社の「若き愛と智の眼覺」が定價があまりに高すぎるのかよく賣れませんのできれいなのを二十冊とゞけて貰ひました。九掛でした。

天佑社の「賣笑婦の研究」はよく賣れて丁度二十冊でもうおしまひでした。七掛半でした。

三續社の「愛と生活と」はよく売れて九冊しかありませんでした　八掛でした。

家の「戀愛の社會的意義」は七掛半でやりました。

お父さん　このやうに母さんのかいた書物は一般に非常な賣行で今度行った本屋で一冊もなくなった本屋は五けん程あつて再版する所もあるので母さんや家中のものはよろこんでゐます　全部の金額二百十一円十五銭でした

全部そろつてから長田さんの所へ知らせてやりました　そして長田さんはその金と汽車賃を以て（原文ママ）きました　そしてすぐ岡山へ出発しなければならぬから家から岡山へ送つてくれるやうにたのみました　そこへ丁度酒井さんが来たのでどうして送るかを聞くと半分程〇〇〇ない中にそれなら私のほうで送つてあげると云つて須田町へ電話をかけて車をもつてこいと云つておいて自分でどんゞとつゝみ初め（原文ママ）たのでみんなしてつゝみました　そして外国から来た大きな板箱へ入れて塩留駅から急行で金光まで送るやうに全部手続きしてくれましたので長田さんや家のものは大変よろこびました。

丁度僕がその日こまちやんと長澤さんの妹尾銀行へお金を取りに行きました　そして百九十九円とつて来ました　預金は九百円以上だつたのです

そして爲替で八幡へ送りました。

又神田青年會館主催の市民自由大学の演説に母さんが行きました。石田さんが雑誌の残本をもつて来いと云ったのもつて行つた所石田さんは御婦人たちには進呈しますが男子方は十銭でお分けしますと云ひました。するとどん／＼十銭札をたばにしてみつて来てさかゑさんの手へ渡したのです。勿論たゞであげる積りでしたのが五円程入ったので一同大笑ひでした。そして僕とさかゑさんがもつて行つたので禮として母さんから一円つゞ貰ひました。その一円で僕は菊の鉢を買ひました。それはみつじさんが花屋の置き場の番小屋に居る関係でそこへ行つて二つ三十銭で買つて来ました。裏の空地がまだ手がつけてないので其處へ今井さんと仲野さんといろ／＼の植木を持ち出して作つて居ます。僕は朝顔を二十回程小鉢に植へて居ます。二日の朝でした。輪の直径が四寸四分といふのが咲きました。菊も大きいのが二つあります。お父さんがかへつて来る時には見事に咲かず積りです。夕方になると裏の空地に裏の人達が出て来て石の上に板をのせてすずみます。

雑誌の方は僕がやつてゐます。だん／＼ふへて来ます。御安心下さい。八幡のお祖母さんが悪かったのですが今はよくなつたのでおぢさんが来て居ます。

あちらの方は大分暑いさうですから御身体を御丈夫に　　さようなら
民郎より
八月元日

お父様へ

この手紙では、わか岡山の岡山や大学での講演をめぐる出来事の報告や、家庭の近況等が父の嘉吉に宛てて報告されている。最も文面を割かれているのは、岡

おまさん
御丈夫で御旅行なされることを御いのりし
ます。僕は丈夫で學校に行つて無事に試験を
終りました。御安心下さい。
母さんが岡山へ七月三十日に立つて講演に
行くことになつて、かう長田さんが来て母さん
の本を全部二十冊づつ買つてそれを岡山
で賣つてたいと云つて来ました。そこで僕
が本屋へ掛合に行きました。
最初近代文明社に行つて「家庭の社會

写真2 山田民郎より山田嘉吉宛てた私信（冒頭部分のみ）、山田弥平治氏私蔵

山の講演先でわかの手配をするための手配についての説明である。わかの手配を、各出版社や書店をめぐって民郎自らが手配したこと、そこで定価のどのくらいの割合で入手したか等、入手の価格に至るまで細かに記述されている。同時に各書店でのわかの手配の売れ行き具合についての記載もある。さらに書籍の岡山への輸送の手配ができるまでの経緯をも事細かに説明している。そして、大学での講演会先では、わかの手配を手伝いをしてわかよりもらった小遣いで、菊の鉢を購入したと書かれており、この菊の花を、嘉吉の帰国に合わせて咲かせるために園芸に励んでいるとの現況が記されている。最後には父の体調を気遣う文面で結んでいる。

わかの手配・講演活動が盛況であることを伝えて嘉吉を安心させようとする

意図ともに、事細かに書店での買い付けや輸送の手続きについて報告しているところから母わかへの役に立っていることを得意げに父にアピールしようとしているのではないかと思われる子どもらしい一面も見取れる。また、父の帰宅を菊の花で迎えるためにその世話に励んでいると記すなど、普段から家族の間に深い情緒的交流があったことをうかがわせる。

(2) 舜一郎の手紙

民郎が嘉吉に宛てて書いたように、舜一郎も同様にして嘉吉に宛てて手紙を綴っている。次は、その舜一郎の手紙を引用する。⁽¹⁵⁾写真3を参照されたい。

日本は今土用中で暑さの絶頂です。

お父さんには其後御無事で旅行を續けておいでになるそうで、大そう結構で御座います。

家では一同無事でお父さんの歸をまっております。

お母さんは毎日二階の八疊で、お父さんの、アイロンをかけた、洋服のような、寝巻きのような物を着て、毎日日々、あせを瀧のように流しながら、朝から夕方まで、原稿を書き續けてゐます。それを時々僕達が寫します。僕達の寫すのは、十枚程しか寫しません、それでさえくたびれますのに、お母さんは朝から夕方まで書いていて、さぞ大變だろうと、時々同情します。

ですから、お母さんに心配させないように、よく、孝行しなければならぬと思つて、大いに努力しております。

お母さんは近頃大元氣です。まだお父さんが出発してから一度として病氣にかゝりません。それから市川さんが色々な事で時々家に來て下さいます。このあいだ、御いでになった時、

お母さんは近頃少し、やせたやうだと云つてゐました。そう云はれて見れ

ば少しやせたかしらと思はれます。

お母さんは少し、やせたと云ふので大よろこびです。

民ちゃんは、今度の成績は普通でした。

まだ裏の地所はあいてゐます。

その所を、中野さんと今井さんと民ちやんと三人で綺麗に掃除をして、そして園藝地を作りました。そこに木を植たり、種をまいたりして、まるで公園のやうになつてゐます。

夜になるとその所は、ばかに、すずしいものですから裏の人達は大いによるこんでをります。

民ちやんは毎夜扇をもつてすずみにいきます。

そうゆうような所があるものですが、したがつて非常に園藝が盛んになりました。それだものですから朝顔などは毎日十程咲きます。それ故朝顔はまだ一度も買ません。

こんどは、お父さんがお歸りになるまでに立派な菊を咲せて見せると云つて、今からむちゆうになって手いれをしております。

さぞ勢いのよい菊の花がお父さんを迎へることだろうと今から喜んでゐます。毎日々々朝、晝、夕、と三度づつ、バケツに水を入れて、裏にもつて行つては色々なことをするものですから、まっ黒になつて、大元氣です。

こまちやんは臺所の事をしてゐます。

そして榮さんと二人で大元氣で洗濯の洗い〇〇です

僕は今度の試験の二、三、日前から、胃がわるくなって一週間以上、寝てゐました。

それ故試験は受る事が出来ませんでした。

それが爲成績は何もありませんでした。

しかし今は、まつたくよくなりました。しかしあまりに、青いと云ふので葡萄酒を毎日のんでおります。

伯母さんは、まだ足が良くならないものですから、こしに、ふとんを、つけて、びつこをひいてあるいてゐます。

しかし元気です。

下の八畳は、すっかり改正して、机や、カーペットや、こしかけを取つてしまいました。そして、三畳にひいて、あつた、ござがひいて有ます。

それゆえ、廣くなりましたものですからよほど、すずしくなりました。

しかし日中は風が入って來ても、九十度以上です。その上に、せみが、ないたりなどしますと、百度程になったやうな気がします。

しかし、朝、夜は非常にすずしくて、月などがさしこんで來ると申しぶんがありません。

こんな時にお父さんがゐたら、ずいぶん、よろこぶだろうとお母さんは云ひます。

八月の末頃畳を全部、とりかえて、家までがお父さんのお歸をまつことでせう。

僕達の方はこのように、皆元気で暮しておりますから御安心下さい。

なによりも御身をおだいじにしてください。

そして大元気でお歸になることを家中の者が楽しんでまっております。

さようなら

舜一郎

お父さんに

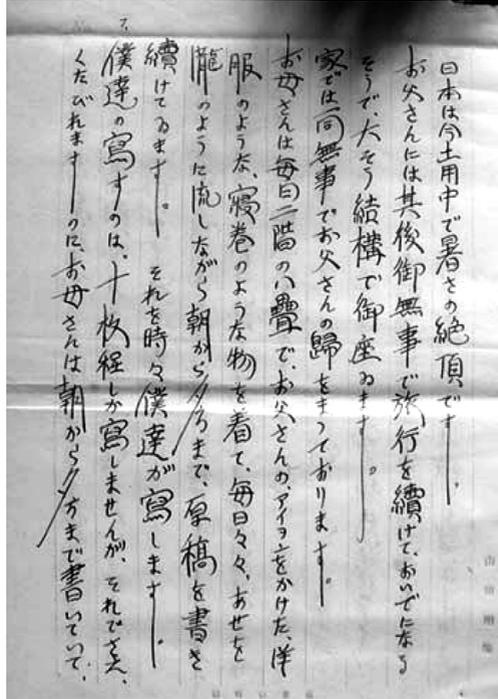


写真3 小林舜一郎より山田嘉吉に宛てた私信(冒頭部分のみ)、山田弥平治氏私蔵

以上、手紙の全文を引用掲載した。手紙中では「お母さん」のわか、山田夫妻の養子の「民ちゃん」、「伯母さん」らの家族や親族、周囲の近況の報告がなされている。民郎の手紙にもあった「こまちゃん」は先に説明した嘉吉の姪のことであろう。手紙の内容は多岐にわたっている。わかの旺盛な執筆活動の様子、その手伝いを民郎とともにしていること、わかの健康のことなど、わかの状況を伝えているほか、裏庭で朝顔などの園芸をしていることや、部屋の改装・模様替えをしたこと、学業では、体調不良で試験を受けられなかったために成績として評価されなかったことなどを伝えている。民郎の手紙にあった菊の花についても言及されており、「こんどは、お父さんがお歸りになるまでに立派な菊の花を咲かせて見せると云って、今からむちゆうになって手いれをし

ております」と綴っている。

この手紙からまず気付かされるのは、文中で舜一郎が、わかを「お母さん」、嘉吉を「お父さん」と呼んでいることである。舜一郎は預けられた形の子どもの、山田夫妻の養子ではなかったようだが、この家庭では、一般の親子関係で子どもが両親を呼んでいるように、舜一郎もわかと嘉吉のことを呼んでいたことがわかる。手紙では「お母さん」であるわかへの思い遣りや、子どもらしい他愛ない近況報告、「お父さん」の帰りを家族で待ちわびる様子が綴られている。

これらの二人の子どもたちの手紙からは、わか家庭生活が円満で、愛情に満ちたものであったことがうかがえる。まさにわか思想における家庭のビジョンが、現実の家庭生活においても実践されていたように見える。

2 舜一郎のカードと写真

次に紹介する写真4の資料のカード⁽¹⁶⁾と写真及び写真5⁽¹⁷⁾は、カードの記述によると、先に紹介した手紙の時期より数年後の1930年のもので、先の手紙とは大分趣を異にするものである。以下の図を参照されたい。詳細は不明だが、写真4のカードはおそらくは舜一郎からわか宛てて書かれたもので、その文面と写真を見る限り、舜一郎は不治の病に冒されて入院中の身であったようだ。向かって右側の少年が、舜一郎であろうと思われる。左側のほうの少年は、見舞いに来た親族の少年か、やはり同様の病で同室に入院していた子どもだろうか。文面は、入院中の舜一郎を見舞いに来たわかと舜一郎とのやり取りを記したものであろう。写真5は写真4の場所と同じ場所にてほぼ同じアングルで撮影された、嘉吉とおぼしき男性とわかとの写真である。憂いを帯びているわか表情が、舜一郎に対する愛情に由来する、深い悲痛を物語っているように見える。舜一郎の見舞いに来た時に撮影したものと推察されるが、背景に写っている鉢や植物など写真4とはその詳細に違いがあり、写真4とは別の機会に撮影した



写真4 舜一郎のカード及び写真、山田弥平治氏私蔵

写真であると思われる。

ここではひとまず、以下に写真4のカードの文面を引用し、検討する。⁽¹⁸⁾

昭和五年一月二十一日、樂園の如き病室にて。

母「舜ちゃん最後の瞬間まであなたの最善をお盡しなさい。そして静かに楽しく天命の来るのをおまちなさい。」

舜「はい、親愛なる母さんよ！ただ感謝外ありません。」

文面は、やがて死を迎えるであろう舜一郎に対してわか母が、心の平安を保って命が尽きるまで精一杯生きるように励ましており、それに対して舜一郎が力強く応答しているという内容になっている。わか母と舜一郎が、深い悲しみを心の底に湛えながらも、深い親子の愛情と信頼関係で結ばれていることがよくうかがえる。短いながらも、二人の関係性を物語るに充分に雄弁なやり取りであ



写真5 嘉吉と思われる男性とわかの写真、山田弥平治氏私蔵

る。舜一郎はわかの実子でも養子でもなかったが、二人の間に築かれていた関係が、わか平素より著書や公演等において主張していた、母子の愛情深い関係のそれであったことを、このカードこそは証明しているのではないかと筆者は考える。前の手紙と併せて、ここに、わかの母性主義が、その家庭生活において確かに実践されていたことが実証できるように思う。

ところで、このカード中の表現からさらに、わかの思想の一側面を読み取るため、焦点をいまま少し別のところに移したい。すなわち、このカード中の「楽園」や「天命」といった表現中に、カードの記述者の宗教的一面の表れを見るように感じられるのである。このカードがわかによって書かれたものか、舜一郎によって書かれたものかは定かではないが、たとえ舜一郎が書いたものであ

ったとしても、舜一郎はわかによって育てられ、その影響を受けていたものと推測されるので、いずれにしても、わか宗教的一面を表すものとして見ることもできるだろう。実のところ、わか母性主義思想において、宗教的要素もまた、重要な因子である。わかの思想のうちの宗教的側面について、前章において検討した佐治の研究では、わかの「個人」観について言及する際、次のように指摘している。

わかにとっては無前提の「自我」、「個人」などありえなかった。「自我」、「個人」は常にそれらを越えた「社会」又「天上の神」の支配の下にあり、それらに制限されるものだった。ここで注目されることは、「天上の神」云々という宗教的意識である。これは実はケイに見られるところであって、わかこれを強く受け継いだと考えてよい。ケイは生命に対して、また人類社会を貫く種族に対して、宗教的な信仰ともいべき意識を持っていた。⁽¹⁹⁾

実は、わかアメリカ時代にキャメロンハウスで受洗した経過がある。その経緯は前章で検討した山崎（1978）の研究に詳しいが、わかごく若い頃、1898年前後～1903年頃に、シアトルで強制されて売春婦としての生活を送っていた過去があり、その生活から脱却して1903年頃に逃げ込んだ先がキャメロンハウスであった。この施設は長老派の系列に連なる施設であり、このキャメロンハウス時代に、わかキリスト教に初めて接触しているのである。この時の感動を、わか次のように綴っている。

亜米利加の日本人間に身を置く私は、唯、女の肉をむさぼり食はうとする男と云ふ動物が其の足を入れる事の出来ない世界を探し求めて居た。私は男の出入を厳禁してある或る尼寺のやうな処へかけこんだ。—中略—自

分達の手は到底届かない階級にぞくするものだと思つて居た文字と云ふものに其処では親しむ事が出来た。そしてそれは聖書であつた。この宇宙を支配する神があつて、その神の目には一切の人間が皆平等であると教へられた時歡喜に満ちた私の目は天を仰いだきり、しばらく。地上の一切を忘れてしまつた。⁽²⁰⁾

このように當時を回想するわかしかし、後にエレン・ケイの母性主義と出遭つたことで、キリスト教の信仰からは離脱している。⁽²¹⁾そして佐治の指摘するとおり、エレン・ケイ流の宗教意識を、その母性主義思想に強く反映させるのである。また、弥平治氏によると、さらに後年には日蓮宗を熱心に信仰していたようである。その頃のことを語つたものか、市川房枝の「おわかさんが少し宗教に熱心になられた事があつて、一後略一」⁽²²⁾との証言もある。

このようにわかはその一生のうちで、その時々自身の心情にしたがつて、帰依する宗教を転々とした。しかし、帰依する先の宗教をひとところに定めることのなかつた経歴は、わか宗教と真剣に向き合なかつたことを意味するものではなく、むしろその都度熱心に宗教と向き合つてきたからこそそのものと考えられる。キャメロンハウスでキリスト教に接触して以降、人智を超越した存在を信仰するという態度は、帰依する宗教や宗派の如何を問わず、常にわかとともにあつたと言えよう。本論ではこれ以上詳細には触れないが、わかのような宗教的側面が母性主義の思想や実践にどのような影響を与えたのか、今後はこうした観点から検討するのも意義あるものになるのではないか。ともかくも、写真4のカードからは、わかのような宗教的意識の片鱗が垣間見えるように思えるのである。

III おわりに

以上、前章では山田家の資料を検討してきた。これまで充分には検証されてこなかった山田わかの実態を、全貌を知るにはまだまだ不足しているにしろ、その一端くらいは明らかにできたのではないかと考える。手紙やカードからは、わか二人の子どもたちと夫の嘉吉を普段から慈しんでいること、二人の子どもたちもまた、嘉吉とわかを父母として慕っていることが見てとれた。わか母性主義の思想全体に充満している、子どもを中心とした愛情あふれる家庭生活への揺るぎない信頼が、わか自身の家庭の実生活に源を発する、もしくは裏打ちされたものであるということが確認できたのではないと思う。一方、わか母性主義の思想は、このようなわか、きわめて特殊で個人的な家庭生活の実際に裏付けられたものであったがために、わか描く家庭のビジョンは、現実に家父長制に苦しめられていた多くの女性たちの家庭の実態からは乖離していたであろうことが、改めて確認できた。それゆえにわかの実践は、一定の限界をもつものでもあっただろう。

なお、いま一度注意に値するのは、わか深い愛情を注いで育てた二人の子どもたちが、その両方とも山田夫妻の実子ではなかった点であろう。わか著作の中ではこの点についてほとんど言及はないものの、わかにとって「母性」を向ける対象は、実子に限定されていなかったのである。わか養子や里親の制度についてどのように考えていたのか、今回用いた文献や資料からは明らかにできなかったが、わか母性主義への理解を深める上でこの点の追究は必要かと考える。今後の課題としたい。

最後に一点、今回の資料を提供して下さった山田弥平治氏について付け加えておきたい。弥平治氏はわか開設した婦人保護施設「幡ヶ谷女子学園」を児童養護施設へと転換させ、施設長として運営に携わった人物である。現在の施設運営は後続に譲っているが、その「若草寮」の施設の名称は、わかの名前

から取ったとのことであつた。弥平治氏は施設長としての在職時代の実践にあつては、一般の家庭の雰囲気を再現することを常に心がけていたという。その実践が優れていたことは、当時の入所児童の多くと弥平治氏とが今でも交流を盛んにしているとの氏の話から、推し量ることができた。弥平治氏の児童養護施設での実践については別稿に譲るとして、わかの温かい家庭を重視する思想が、養子の民郎氏を経て孫の弥平治氏に確かに継承され、実を結んでいたことを書き添えて結びとしたい。

謝辞

この度の資料の提供にあたって、山田わかのお孫様でおられる山田弥平治先生には、たいへんお世話になった。数回にわたる取材、資料の収集にあたって、いつも快く、丁寧に対応して下さるとともに、わかの前生様の様子なども熱心に語ってくださり、著作や文献からのみではうかがい知ることができない、山田わかの実在な人物像に触れ、理解が深まったように思う。重ねて、感謝申し上げます。

注

- (1) 山崎朋子『あめゆきさんの歌 山田わかの数奇なる生涯』文芸春秋、1978年
- (2) 五味百合子編著『社会事業に生きた女たち』ドメス出版、1973年、167-182頁
- (3) 佐治恵美子「山田わかと母性主義」『お茶の水史学』第18号、1975年3月、15頁-30頁
- (4) 佐治恵美子「山田わかと母性主義」『お茶の水史学』第18号、1975年3月、23頁
- (5) 今井小の実『社会福祉思想としての母性保護論争』ドメス出版、2005年
- (6) 山田わか『現代婦人の思想とその生活』文教書院、1928年、303頁
- (7) 山田わか『女、人、母』森江書店、1919年、29頁
- (8) 山田わか「民族生命線の擁護」『母性保護』1号、1936年、1頁
- (9) 山田わか『女、人、母』森江書店、1919年、15頁
- (10) 山田わか『恋愛の社会的意義』東洋出版社、1920年、245頁
- (11) 山田家肖像写真、山田弥平治氏私蔵

- (12) 山田わか『現代婦人の思想とその生活』文教書院、1928年、255頁
- (13) 同書、255頁－256頁
- (14) 山田民郎より山田嘉吉に宛てた私信、山田弥平治氏私蔵
- (15) 小林舜一郎より山田嘉吉に宛てた私信、山田弥平治氏私蔵
- (16) 舜一郎のカード及び写真、山田弥平治氏私蔵
- (17) 嘉吉と思われる男性とわかの写真、山田弥平治氏私蔵
- (18) 舜一郎のカード及び写真、山田弥平治氏私蔵
- (19) 佐治恵美子「山田わかと母性主義」『お茶の水史学』第18号、1975年3月、21頁
- (20) 山田わか『恋愛の社会的意義』東洋出版社、1920年、103頁
- (21) 同書、110頁
- (22) 市川房枝『だいこんの花』新宿書房、1979年、231頁

(第18期第3研究会による成果)